

## ★「武蔵国府寺」創建伽藍の復元（訂正版2－9①）

川瀬健一

### 9) 26ヶ国の「国分寺」の再検討

以上のように従来説を検討しただけで、「国分寺」の中で、以前から国府に近接して国府の宗教行事を担ってきた「国府寺」を改造して七重塔を建立し「国分寺」としたものと、あらたに七重塔をもった「国分寺」として建立されたものがあることがわかり、これはその寺院の伽藍形式と国府との距離で峻別できる可能性を示している。

そこで「武蔵国分寺」の変遷に関する二つの新たな課題を検討する前に、先に、七重塔をもった「金光明寺」の全国的展開を願った聖武天皇の死の直後までに七重塔を完成させた「金光明寺＝国分寺」の例と考えられる26ヶ国の「国分寺」を挙げたが、本当にそう考えてよいのかどうか、以上の検討から導き出された仮説に依拠して検討しておこう。

すなわち、天平勝宝8（756）年12月20日に、「越後・丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・美作・備前・備中・備後・安芸・周防・長門・紀伊・阿波・讃岐・伊予・土佐・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後・日向など26の国には国毎に灌頂幡一具・道場幡四十九具・緋綱二条を分ち下し、各国で行う太上天皇の一周忌のご齋会のりっぱな飾りに充てさせた。使用後は金光明寺に収め置き、永く寺物として、必要なことが起これば出して用いさせた」との記録が残る26ヶ国の「国分寺」である。

そして検討に用いる仮説とは、

① 塔が回廊の内の古式の「国分寺」で国府に近接しているもの

＝「国府寺」の塔を七重塔に改築して転用

② 塔が回廊の内の古式の「国分寺」で国府から遠いもの

a＝国府から離れた古式の寺院の塔を七重塔に改築して「国分寺」に転用

もしくは

b＝以前からあった「国府寺」の塔を七重塔に改築して「国分寺」転用

＝当時の国府はもっと近い。つまり国府は移動した。

③ 塔が回廊の外の新式の「国分寺」で国府に近接しているもの

＝「国府寺」の塔を解体し、回廊の外に新たに七重塔を建立して「国分寺」に転用

④ 塔が回廊の外の新式の「国分寺」で国府から遠いもの

a＝国府から離れた古式の寺院の塔を七重塔に改築して「国分寺」に転用

もしくは

b＝新たに、国府から離れたところに七重塔を備えた「国分寺」を建立

の「国分寺」の成り立ちについての6例の仮説である。

この仮説の中で「③塔が回廊の外の新式の「国分寺」で国府に近接しているもの」の中で、「国府の近くに新たな国分寺を建立」を入れなかったのは、聖武天皇の詔の中に「国分

寺」は人家から離れた清浄な場所に作らねばならないことが強調されていたので、この例はないだろうとの想定からである。しかしもし、そうした「国府の近くに新たな新式の伽藍配置をもった国分寺を建立」した例が見つかるならば、従来のものを、③塔が回廊の外の新式の「国分寺」で国府に近接しているもの a=「国府寺」の塔を解体し、回廊の外に新たに七重塔を建立して「国分寺」に転用とし、新たに b=国府の近くに新式の「国分寺」を新造したを想定するべきなのかもしれない。

26ヶ国の国分寺にはある特徴がある。それは、山陰道諸国・山陽道諸国・南海道諸国・西海道諸国の国分寺であって、例外は北陸道に属する越後国分寺だけであることだ。

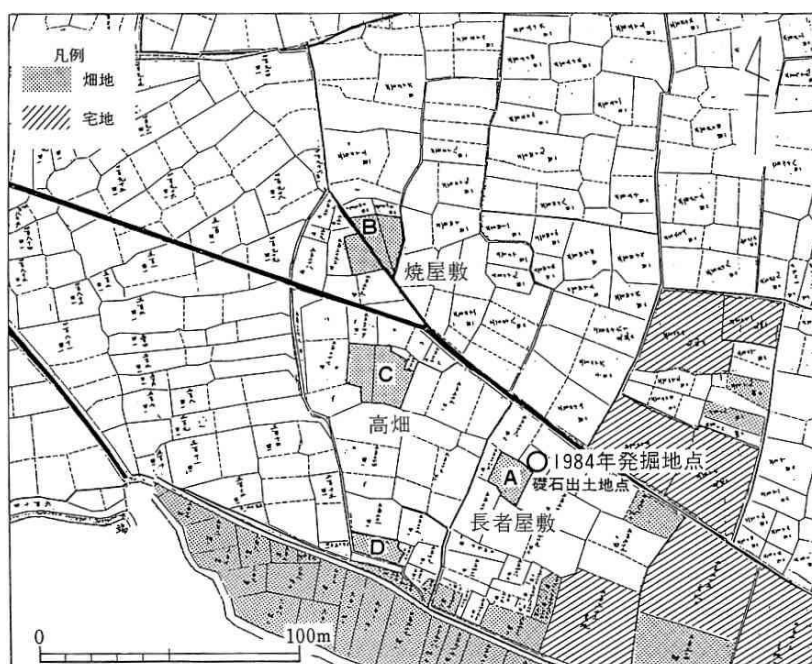
### ①北陸道と山陰道諸国の国分寺

まず北陸道に属する越後国分寺と、山陰道に属する諸国の国分寺を再検討しておこう。

北陸道は、越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡・出羽の諸国であるが、26ヶ寺には越後だけが含まれている。

#### 1：越後国分寺

新潟県上越市にある「本長者原廃寺」が越後国分寺の最有力候補として最近浮上している。この古代寺院跡はまだ全面的な発掘がなされず、地上に残る土壇状の遺構とその地名や相互位置関係から伽藍配置や大きさが推測されているだけだが、伽藍配置は現在東大寺式が想定されている。もともなった地籍図などを見ると、B地点を講堂、C地点を金堂、A地点を塔、D地点を南門と想定したものである。塔の規模は、基壇は少なくとも14m四方と巨大である。つまり新式の回廊の外に塔を持つ伽藍形式の七重塔を持った寺院。



(「長者原遺跡旧地籍図」)

そして越後国府もまだ遺構など出ていないのだが、この本長者原廃寺もその一部を占める今池遺跡群が越後国府の最有力候補とされ、この遺跡群の中で国府遺跡とみられる今池遺跡と本長者原廃寺までの距離は、南西に約 200m であり、ここが越後国府であれば、越後国分寺は、国府に近接した古式伽藍を持つ「国府寺」を改造して七重塔を持つ「国分寺としたか、あるいは国府に近接した所に新たに「国分寺」を建立したものとなる。

先に見た類型でいえば、③-a か③-b である。

なお越後国分尼寺は不明である。

## 2：丹波国分寺

遺構は京都府亀岡市千歳町国分にある。ここは発掘調査がなされており、218m 四方の伽藍で、西に金堂、東に塔を配して、これらを回廊と築地塀で取り囲んだ法起寺式伽藍形式の寺である。塔の規模は、基壇は 15.6m 四方で、塔の初層の一辺は 8.9m。これも七重塔とされている。金堂の規模は基壇の大きさで東西 25m・南北 15.4m。金堂の規模に比して塔が大きい。

なお丹波国分尼寺は、国分寺の西約 450m に位置する御上人林廃寺跡（亀岡市河原林町河原尻）と推定され、寺域は 165m 四方。二つの寺は古代の山陰道を挟んで位置し、二つの寺の寺域の南限は同じ条理線上にある。

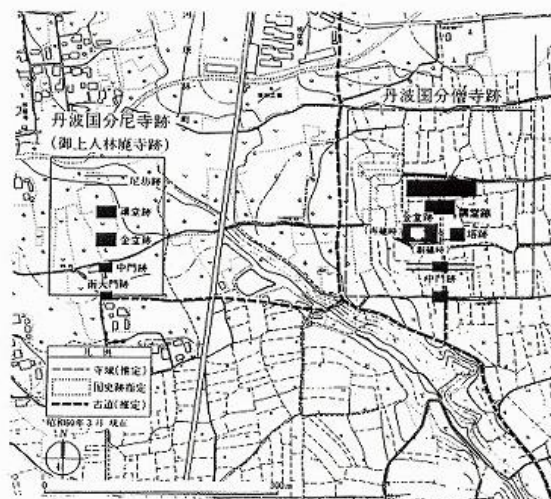


図 80 国分寺・尼寺位置関係図

(丹波国分寺・国分尼寺の地図)

また丹波国府跡と推定されている亀岡市千代ヶ丘遺跡は、この寺院跡の西方 2.5 km。間には桂川が流れている。しかし国分寺と国分尼寺が古代山陰道を挟んで東西に位置し、さらに二つの寺域の南限が同じ条理線上にあるということは、二つの寺院の南側の条理遺構のある平地に、方 1 km ほどの規模の国府を想定することも可能であり、丹波国府の西側に隣接して南北に山陰道が走っていたと考えることも可能である。

従って、丹波国分寺は、丹波国府に隣接している古式の回廊の内に塔を備える法起寺式伽藍の「国府寺」の塔を七重塔に改造して国分寺としたものと判断することができる。

塔を回廊の外に造らなかったのは、十分に回廊内の敷地が広がったので、回廊内の塔を七重塔に建て替えたのではないだろうか。

先の類例でいえば、国府が遠い亀岡市千代ヶ丘だと②-a だが、国分寺のすぐ南で古代山陰道の東に国府があったとすると②-b となる。

なおグーグルマップで確認すると、この付近の条里制遺構と考えられるものは正方位であるので、国分寺・国分尼寺伽藍もまた正方位に想定されている。

### 3：丹後国分寺

京都市宮津市国分にある。金堂跡、塔跡、中門跡などの礎石や基壇が残るが、これは鎌倉時代に再建されたときのもの。発掘調査はされていないので、創建伽藍の配置も規模も不明。yahoo 地図の航空写真で見ると、鎌倉時代再建の伽藍は、金堂の規模は南北 20m ほど。塔は金堂の中軸線から西に 45m ほどのところにあり、15m 四方ほど。金堂南辺と塔北辺は近接。ここから想定できる伽藍配置は、金堂院の西側に塔がある国分寺式。

伽藍中軸線はほぼ正方位。

丹後国府も不明だが、候補地の一つの宮津市府中は、国分寺跡の東方およそ 1 km のところ。

鎌倉時代再建の伽藍が創建伽藍を復元したものと仮定すると、国府近くに新式の塔が回廊の外にある伽藍を建立したか、古式の伽藍を持つ「国府寺」の塔を解体し、金堂院の西側に七重塔を建立して国分寺にしたと判断することも可能である。つまり③-a か③-b のタイプになる。

国分尼寺は不明である。

### 4：但馬国分寺

兵庫県豊岡市日高町国分寺にある。寺域は 160m 四方。東大寺式と分類されているが、回廊に囲まれた金堂院の西側、金堂から 55m の所に塔がある国分寺式伽藍。金堂基壇は東西 21m、南北不明。塔の規模は基壇では 16m 四方。

金堂の東方に南北 52m の建物で回廊を有するものが見つかっている。



(「但馬国分寺跡の伽藍配置」)

なお但馬国分寺は正方位と想定されているようだ。

但馬国府は国分寺の西南 500mほど。

このため但馬国分寺も、国府に隣接する位置に新たに新式の回廊の外に塔を持つ伽藍を建設して国分寺としたか、もしくは古式の伽藍をもった「国府寺」の塔を解体し、金堂院の西に七重塔を建立して「国分寺」とした可能性が見て取れる。

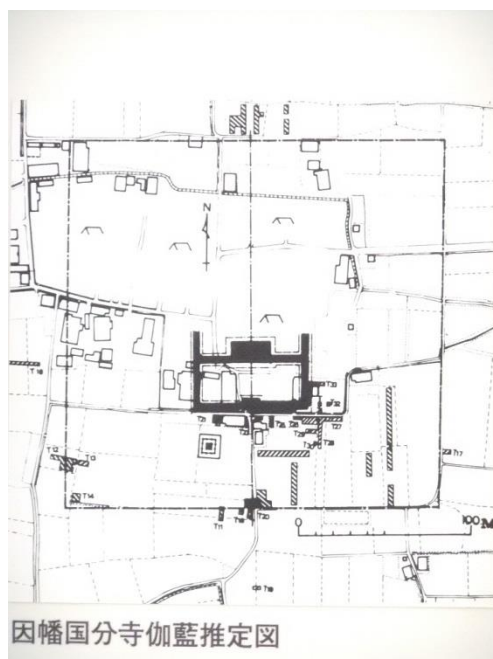
この場合の古式の伽藍だが、金堂前の前庭が広く、伽藍内郭を区切る回廊の入り口である中門と外郭の入り口の南門の距離が短いことと、講堂までも含めた伽藍中枢まで含めると伽藍全体の形が縦長の長方形になることから、大官大寺式か？ 大官大寺式の回廊内の塔を解体して、金堂院の西側に新たに七重塔を造った。中門と南門の間に塔を置いて東大寺式としなかったのは、この間の広場が狭かったからか？

この国分寺も類例で言えば、③-a か③-b のタイプである。

国分尼寺跡は、僧寺跡の北方約 1 km の豊岡市日高町水上・山本に推定されている（豊岡市立日高東中学校付近）。現在は礎石 2 個が残るのみで、伽藍の詳細は明らかでない。

## 5：因幡国分寺

鳥取市国府町の国分寺集落そのものが遺構と考えられており、寺域は方 200m の正方形と推定。塔跡と南門などが確認されたに留まるが、なぜか東大寺式が推定されている。



（「因幡国分寺推定伽藍配置図」）

『新修国分寺の研究』に所収の「因幡国分寺推定伽藍配置図」を見ると塔と南門が約 40m と離れていることが根拠のようだ。しかし、グーグルマップで国分寺集落を確認すると、寺域の中軸線上に金堂跡とみられる神社があり（配置図の中門と金堂の間の回廊に囲まれた空間の位置の中門のすぐ北）、その南西部に塔がある。推定伽藍中軸線から塔までの距離と、塔の中心線と伽藍中軸線との交点からこの神社までの距離を見るとほぼ同じであるので、薬師寺式も想定可能であり、こうみれば南門跡の少し北側に中門があったと想定することも可能である。さらに内郭域が南北の長方形と考えれば、大官大寺式も想定可能であり、金堂と門の発掘だけで東大寺式を想定するのは行き過ぎと思われる。塔の規模は基壇がおよそ一辺 15m。

また因幡国分寺跡と想定されている国分寺集落をグーグルマップで確認すると、国分寺遺跡の外郭と想定されている集落の東限の南北道と西の限界の南北道、そして中央を南北に走る道はすべて、真北に対しておよそ 5 度東に傾いていることがわかる。

因幡国府は鳥取市国府町中郷で、平安時代末から鎌倉時代にかけての国衙中心部の遺跡が発掘されている。ここは国分寺跡の東北 600m ほど。

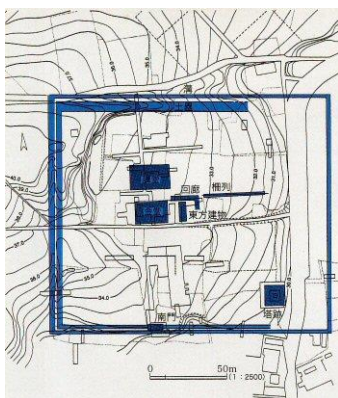
こう考えると、因幡国分寺は、国府の近くに新式の回廊の外に塔がある「国分寺」を新造したと考えることもできるし、国府に近接した古式の伽藍配置の「国府寺」を改装して、七重塔を備えた「国分寺」としたと考えることも可能である。

つまり先の類例では、③-a か③-b のタイプである。

なお国分尼寺は国分寺跡の東方 600m にある法花集落周辺と推定されている。

## 6 : 伯耆国分寺

鳥取県倉吉市国分寺にある。発掘の結果、寺域は東西 182m・南北 160m の横長の規模で寺域の周囲に溝を巡らせ、溝の内側の南側に築地塀、残り三方には土塁が築かれていることが確認された。寺域の西寄りの区域に金堂・講堂・回廊の跡が検出され、これらの南方に南門跡、寺域の東南隅に塔跡がある。金堂と講堂は南北に近接して位置し、塔は回廊外の東南方に建っていた。



(「伯耆国分寺遺跡全体図」)

伽藍形式は東大寺式とされているが、塔は伽藍中軸線のおよそ 75m 東方。東大寺式とするにはあまりに離れている。回廊の全体像が明らかではないが、周辺地形からすれば、金堂の南側に西から張り出した山地の裾野があるので、そこより北側に回廊の南辺あるのではなかろうか。回廊が金堂の北辺に取りついた形である。その回廊南辺と南門の間にある広い敷地の東南に塔があるので東大寺式としたのであろう。だが塔の位置が伽藍中軸線から遠すぎる。現在見られる塔遺跡は、基壇が一辺 20m 程度と巨大である。またグーグルマップで見ると、伽藍中軸線が東に 5 度程度傾いていることもわかる。そしてこのことは「伯耆国分寺遺跡全体図」でも確認できる。

国分寺は伯耆国庁の東側に隣接してあるので、伯耆国府の近傍に新式の回廊の外側に塔がある伽藍を新造したと考えることもできるが、新造であれば塔を金堂院のもっと近くに持ってくる事も可能である。あるいは塔は金堂院の南に張り出した山の裾野を避けて作られたように見えるので、古式の、たとえば東西に長い回廊を持って中に塔と金堂を並置した法起寺式か法隆寺式の伽藍形式を持った「国府寺」を改築して、回廊内の塔と金堂を解体して新たに回廊の北側に金堂を築き、山裾を避けて回廊外の東南に七重塔をもった「国分寺」にしたものとも考えることもできる。

つまりこの寺も先の類例で言えば、③-a か③-b のタイプである。③-a の可能性が高いと思われるが。

なお国分尼寺は国分寺跡の北東側 50m に隣接している法華寺畑遺跡と考えられている。

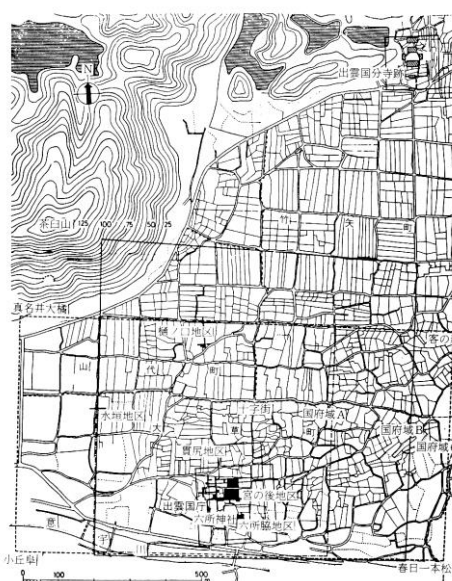
## 7 : 出雲国分寺

島根県松江市竹矢町にある。寺域は方 200m ほどと考えられ、伽藍配置は南から南門、中



門、金堂、講堂、僧房が一直線に並び、中門から講堂につながるコの字形の回廊があり、金堂、講堂、僧房の間はそれぞれ瓦敷きの道で結ばれる。塔は中門と南門の間東側にあり、南門から南へは幅約 6m の石敷きの道があった。東大寺式伽藍配置と考えられている。塔の大きさは基壇が 15m 四方ほど。

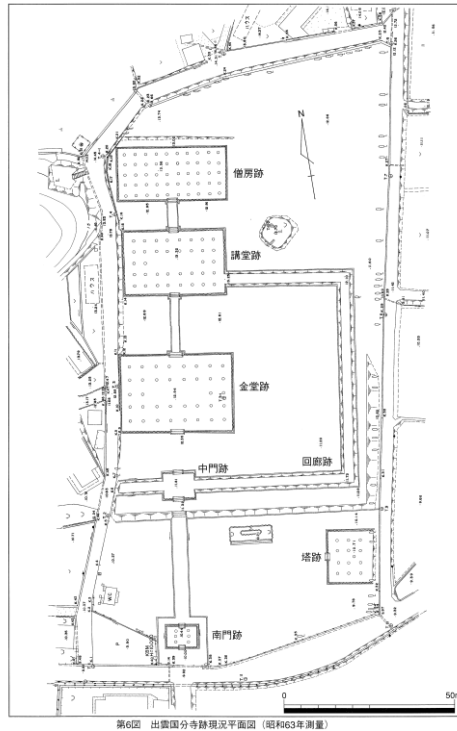
またこの寺院の南門から南に延びる 500m ほどの参道と見られる幅 6 m の石敷きの道は、そのまま出雲国府の東辺につながっており、周囲の条理制遺構とも一致し、寺院の中軸線や参道は、周囲の条理制遺構とともに真北に対して東に 5 度ほど傾いており、このことからこの寺院は国府と一体のものとして作られたことがわかる。つまり「国府寺」である。国府からの距離は 1.2 km ほど。国府条坊からは 500m の距離である。



出雲国府発掘調査地とその周辺（『出雲国府跡発掘調査概報』による）

（「出雲国府と国分寺」地図：木下著『国府』より）





〔「出雲国分寺現況図」〕

この発掘を元に復元した現況図（『出雲国分寺発掘報告書』松江市文化財調査報告書第 96 集 2004 年：奈良文化財研究所全国遺跡報告総覧：

<http://sitereports.nabunken.go.jp/ja/14269>）を見ると、伽藍配置は、この伽藍を東大寺式とすることには無理がある。東大寺式は金堂の北辺から回廊が出て中門に至るが、出雲国分寺は講堂の南辺から回廊が出て中門に至っている。そして東大寺式と見るには金堂前面の前庭があまりに狭いことだ。8 世紀の伽藍である塔が回廊の外に出た伽藍形式では、金堂こそがその信仰の中心であり、金堂に納められた仏像こそが礼拝の中心である。したがって金堂前庭でさまざまな儀式が行われる。しかし出雲国分寺は金堂前庭が狭すぎる。

そして回廊がコの字型なのも異常である。西側がせり出した山裾で作ることができないのだ。新造であればなぜこの山裾を避けて寺地をもっと東に移して造営できないのか。さらに講堂よりも金堂が大きいのも不自然である。

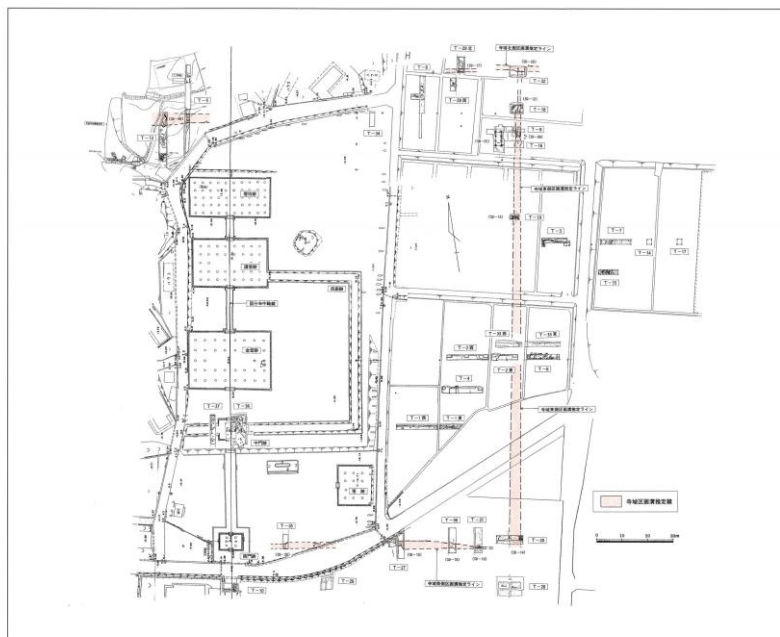
はたして新造の東大寺式の「国分寺」として良いのであろうか。

従って、国府近傍の古式の伽藍の「国府寺」を改装した可能性もある。

可能性だが、法起寺式または法隆寺式、もしくは大官大寺式の伽藍を改造して、回廊内にあった塔や金堂を解体して（大官大寺式なら塔を解体して）、回廊内に新たに大きな金堂を新築し、回廊外に大きな七重塔を新築した可能性もある。

しかし平成 10 年度から 14 年度にかけて行われた寺域を確定するための調査で、伽藍の北辺・東辺・南辺を区画する大溝が発見され、北辺は伽藍中軸線上では金堂から北 95m 地点、東辺は金堂中心からほぼ 111m の地点を南北に走り、南辺は金堂中心から 71m の地点

で南門の延長上であることが確認された。しかし区画溝の角を測定してみると北辺は中軸線上とは異なり 114m地点となるので、寺域は方形ではないことがわかっている。



第78回 出雲国分寺寺域区画溝推定位置図

この 5 年間の調査で確定された区画溝の図を見ると、回廊の東辺からこの伽藍内郭溝までの距離はおよそ 60m と広く、さらに回廊の南辺から南門の伽藍内郭溝までも 35m あるので、この区画溝の東辺までの広さが寺地であれば、伽藍全体をもっと東に移して、完全な形の回廊をもった寺院とすることも可能であったことがわかる。

そうしなかったのは、ここにすでに古式の回廊の中に塔と金堂をもった比較的小規模で張り出した山裾のために回廊を口の字型に出来なかった「国府寺」があった。ここを改造して七重塔を持った「国分寺」にせざるを得なかったので、回廊の中にあつた小型の金堂と塔を解体し、回廊内には大型の金堂を新造し、さらに回廊の東南の隅に大きな七重塔を造ったのではないかとも思われる。

つまり出雲国分寺は、現状では③-b なのだが、③-a の可能性も高い。

国分尼寺は僧寺の東方 400m ほどにあると思われるが、寺域の大部分が宅地となっており遺構は確認できていない。

## 8 : 石見国分寺

島根県浜田市国分町にある。塔跡と礎石が一部残っているのみで、全体像は明らかになっていない。昭和 60 年 (1985) に塔跡が一部発掘調査された。発掘調査の結果、塔跡の縁に並んだ磚列が確認された。これにより、12m~14m の基壇の上に約 8m 四方の塔が建っていたと考えられている。塔跡は真北を基準にして建っていたとされる。なお跡地にたつ金蔵寺の寺域からは白鳳時代 (7 世紀後半) の作と推定される銅造誕生釈迦仏立像が出土した。国分寺跡から誕生仏が出土したのは全国初で、仏像は銅製で、頭部と両手首などを欠

くが、全高 11.6cm、像高は 9cm、重さ 170g と小型である。

国分寺跡は、推定国府跡とみられる上府遺跡や古市遺跡の北方 1.5 km。両遺跡のすぐ西側 500mほどには、「国府付属寺院」とみられる下府廃寺跡があり、ここは塔と金堂のみで法起寺式伽藍配置に近い。白鳳時代末とみられている。

しかし国分寺そのものが出土仏から白鳳時代創建の可能性もあることから、国分寺跡の西 400mほどのところの石見市国府地区にも国府を想定することも可能である。このことから石見国分寺は、石見国府からほど近い丘陵上にあった「国府寺」を改築して、七重塔を備えた「国分寺」としたと見ることも可能である。

ただし伽藍配置が不明なので、先の類例に当てはめることができない。

なお国分尼寺は、国分寺跡の東 400mのところにある現国分寺と見られている。

以上が、北陸道の越後国分寺と、山陰道諸国の国分寺の再検討である。要点だけ表にしておこう。

| 国分寺名 | 伽藍配置       | 塔基壇の規模  | 国府からの距離    | タイプ         |
|------|------------|---------|------------|-------------|
| 1：越後 | 不明（東大寺式想定） | 14m四方   | 近接・200m東   | 3-a か b?    |
| 2：丹波 | 古式（法起寺式）   | 15.6m四方 | 近接?すぐ南     | 2-a か b     |
| 3：丹後 | 不明（国分式想定）  | 15m四方   | 近接?東 1 km  | 3-a か b     |
| 4：但馬 | 国分寺式・西塔    | 16m四方   | 近接・東北 500m | 3-a か b     |
| 5：因幡 | 不明（東大寺式想定） | 15m四方   | 近接・西南 600m | 3-a か b     |
| 6：伯耆 | 東大寺式       | 20m四方   | 近接・東側      | 3-a か b     |
| 7：出雲 | 東大寺式       | 15m四方   | 近接・南 600m  | 3-a か b a か |
| 8：石見 | 不明         | 14m四方   | 近接?東 400m  | ?           |

この検討した「国分寺」は、ほとんどが国府に近接しているか、近接している可能性のある「国分寺」である。そして特に山陰道諸国「国分寺」は、石見と丹波を除いた 5ヶ国すべてが現状では新式の伽藍をもった「国分寺」なのだが、どの「国分寺」も「国府寺」を改造したタイプと考えることが可能である。そして、丹波国分寺はまさしく「国府寺」を改造したものと考えられることが特徴である。

またこの地域では、聖武天皇の詔に応じて、国府から離れた「清浄」な地に「国分寺」を建立した例、④-b の例が見られなかったことも特徴的である。

以上の再検討は主にインターネットで得られる資料に基づいたもので、残念ながら発掘報告書を一部でも見られたものは出雲国分寺と石見国分寺の二つだけである。『新修国分寺の研究』などに掲載された諸論文や、それぞれの発掘報告書を精査できれば、もっと興味深い事実、たとえば、古式の伽藍を改造して「国分寺」とした痕跡、つまり丹波国分寺なら塔基壇を拡大した跡があるはずであり、他の国分寺でも、回廊内の塔を解体した跡、すなわち削平された基壇の下の掘り込み地業（地表面から一定程度基壇とほぼ同じ大きさに

穴を掘り、そこに土を交互につき固めた跡) などが見つけられるのかもしれない。

続いて山陽道諸国の「国分寺」を再検討してみよう。

(2016年11月21日)

★追記と訂正：

②丹波国分寺

その後肥沼さんが『新集国分寺の研究』の当該の記述を精査したところ、塔に改造の後が見られ、それに私が国立奈良文化財研究所のデータベースで調べた所、金堂にも改造の後が見られた。

●肥沼報告：2017年1月3日(火)04時47分

『新集 国分寺の研究』の丹波国分寺の塔基壇の部分の記述について見てみたところ、それらしい部分を見つけましたので、ご報告いたします。

「(石積列が二列あることについて) 二重基壇ではなく、塔基壇の修理もしくは再建によるものと考えられる」とありました。

また、「塔基壇の規模は、内側の石列で一边が一五・六尺(五二尺)、外側のもので一六・四尺(五五尺)を計る。」とも。

これは川瀬さんのご指摘のあった

「塔基壇の拡大」ということではないかと思いました。

●川瀬追記：2017年1月3日(火)11時58分

肥沼さんへ

丹波国分寺の塔基壇の精査。ありがとうございます。メールで送られた画像は不鮮明でよくわからなかったのですが、奈良文化財研究所の古代寺院遺跡データベースで丹波国分寺を検索し、その建物データから、塔の基壇実測図を見ることができました。

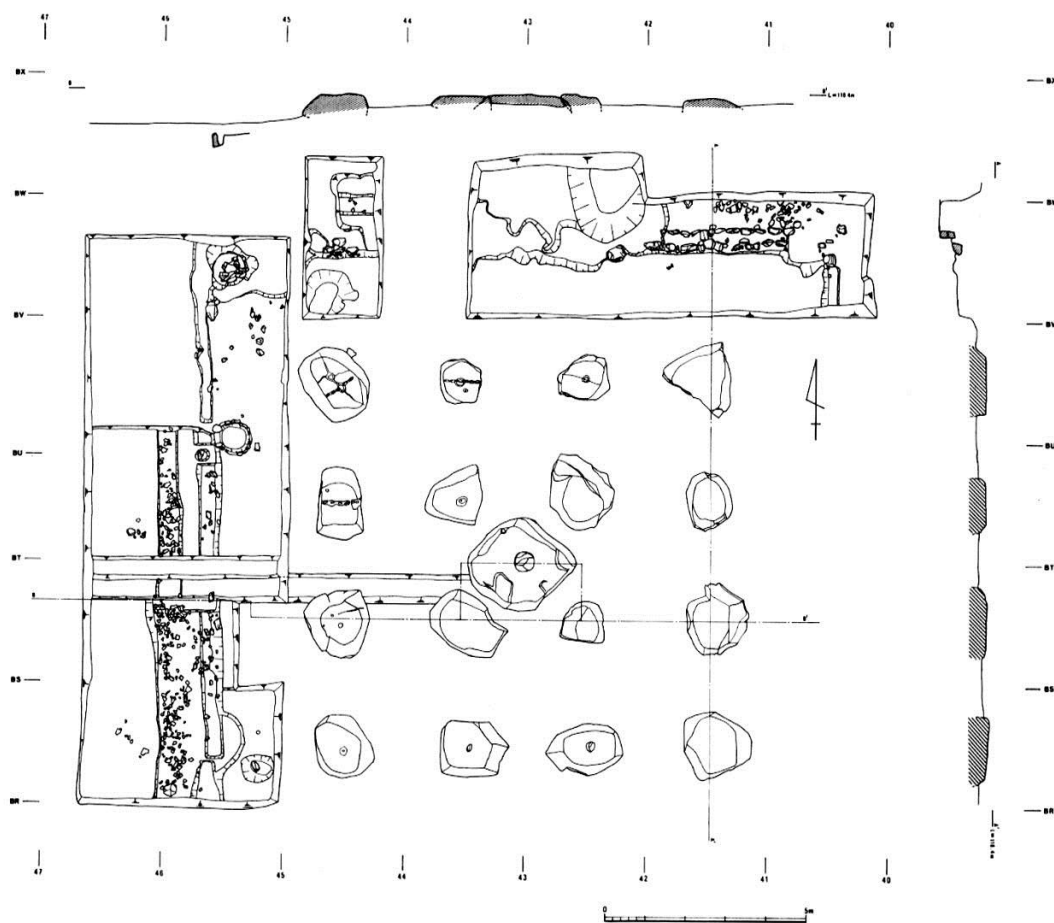
<http://mokuren.nabunken.go.jp/NCPstr/strImage/m103274-9215/83850.jpg>

図の説明には、「修理あるいは再建が行われ、基壇は一边16.4mのものとは15.6mのものがあり、両石積とも2段目まで遺存している。いずれも自然石を用い、地覆にあたる最下段は縦積、二段目からは横積みになる。また基壇は瓦積となり、内側が奈良時代、外側が平安時代末期のものと考えられる。

西縁部では石列は検出されず、抜き取り痕の外側には0.6mの犬走り状のテラスがめぐり、その外側に幅0.4mの素掘りの雨落溝が巡らされている。」とあります。

基壇幅としてはわずか80cmの拡大ですが、断面図でも上に40cmほど土盛りがされていますので、肥沼さんのご指摘の通り、塔を拡大した痕跡だと思います。内側を奈良時代末としたのは、聖武詔で作られたとの通説に従ったため。このため外側の拡大の跡を平安時代初としたものか。逆に外側の拡大の跡を聖武詔によると考えれば、外側の大きい基壇が8世紀奈良時代中ごろのもので、内側の少し小さいものは7世紀のものとなりましょう。

奈文研のデータは、亀岡市教委『史跡丹波国分寺跡発掘調査』(1987年)のものです。



塔跡基壇実測図

亀岡市教委『史蹟丹波国分寺跡発掘調査』（1987年）より 丹波国分寺：83850

●川瀬追記2：2017年1月3日（火）12時13分

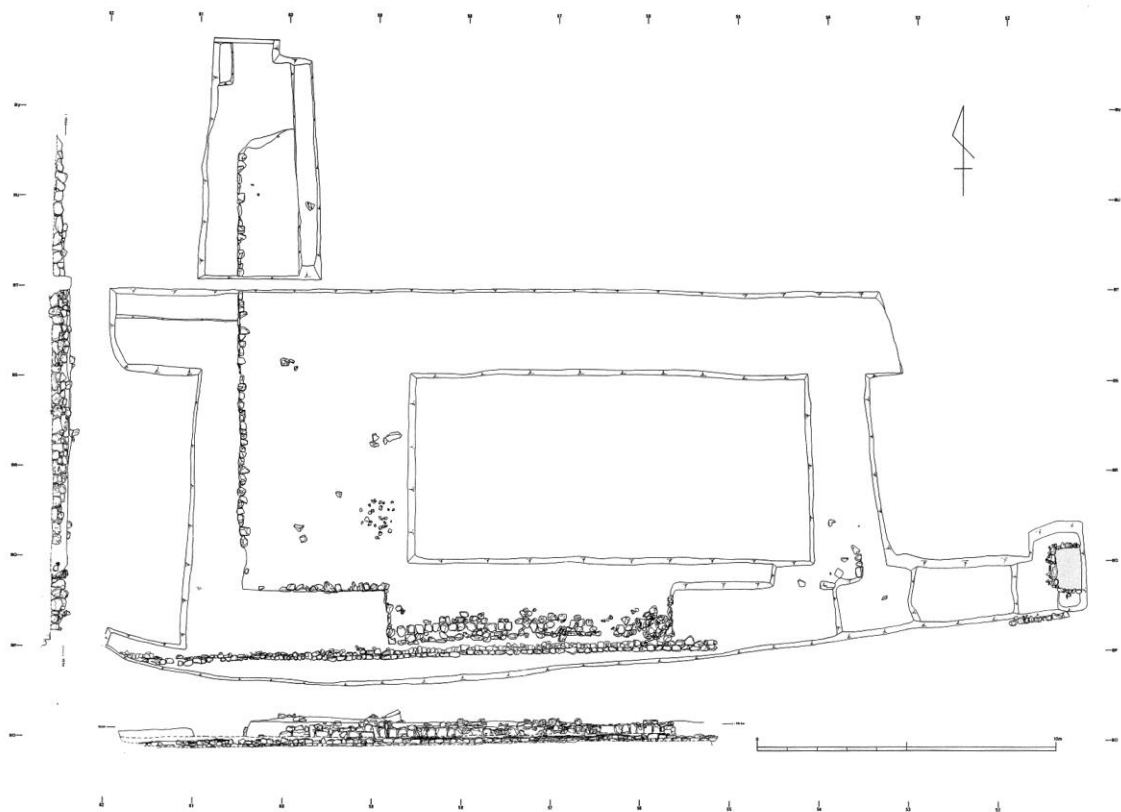
追伸

奈良文化財研究所のデータをさらに精査したところ、丹波国分寺は金堂も拡大されていることがわかりました。金堂基壇のデータは、

<http://mokuren.nabunken.go.jp/NCPstr/strImage/m103274-9210/85504.jpg>

内側の石列で、逆凸型のものが、古いもので、これが奈良時代と判断され、外側の長方形で大きなものが平安時代末とされている。これも国分寺なのだから最初のもは聖武詔によると考え、後の大きなものは平安時代末とした。

丹波国分寺は、国府に近い古式の法起寺式伽藍の寺を改造して、塔も金堂も大きくしたものと考えられますね。



金堂跡実測図 亀岡市教委『亀岡市文化財調査報告書第12集』(1983年)より 丹波国分寺: 85504

### ⑤因幡国分寺

この国分寺についても従来説とは異なるデータが出てきました。

#### ●肥沼報告：2017年1月4日(水)06時00分

川瀬さんへ 京の肥沼です。

質問です。

因幡国分寺・・・四至がほぼ真北方向をとっているのに対して、

塔は真北より東に振って建てられていたことがわかった。

(川瀬さんは「因幡国分寺跡と想定されている国分寺集落をグーグルマップで確認すると、国分寺遺跡の外郭と想定されている集落の東限の南北道と西の限界の南北道、そして中央を南北に走る道はすべて、真北に対しておよそ5度東に傾いていることがわかる。」とのことですが、『新修 国分寺の研究』P101には以上のように書いてありました)

#### ●川瀬応答：2017年1月4日(水)14時23分

肥沼さんへ

因幡国分寺。なるほど塔の軸は東に傾いている。復元図を見たら確かに塔は東に傾いていますね。ということは真北で伽藍の範囲の四至を復元したことが間違っているのでしょうか。何しろ発掘で確認されているのは塔と南大門だけですからね。

塔が東に何度傾いているのか知りたいですね。山陰・山陽・南海・西海の各道で、古式

の寺院はほとんど伽藍中軸線が真北に対して東に5度傾いていますから。

●川瀬追記：2017年1月4日（水）17時47分

追伸：奈良文化財研究所の因幡国分寺建物データの塔のデータ

<http://mokuren.nabunken.go.jp/Scripts/strieveW.exe?S55544604181972&SN=2&DB=%E5%BB%BA%E7%89%A9&L=1&theCard=3260>

では、「礎石下のみ壺掘り地業した跡が検出されている。四天柱礎部は頭大の河原石を混入し築き固めたものとなっている。礎石は国分寺境内に移転されている。」とある。つまり塔基壇は版築によって築かれた堅固なものではなく、盛土したあと、塔の礎石の下だけ壺状に穴を地山まで掘り、そこに河原石を混ぜた土でつき固めたものということ。きわめて簡略化した方式。

ただしこの塔は五重塔と推定されている。礎石から3間×3間で、塔身は8.7m四方と。

これは多くの国分寺の塔が塔見9m四方で七重塔とされているのと異質。

基壇の大きさと礎石だけでは何重の塔かを推定できないということかな。一応他の例からみて七重塔としておきたい。

データもとは「『国分寺遺跡』『因幡国府遺跡発掘調査報告書IV 国府地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査』 発行所 鳥取県教育委員会 発行年 1976」。

そして南門は、「上部は削平により不明。掘込地業のみ確認。」とある（データもとは同じ）。ということは南門は地山を掘ってその底から版築法で土壇を築いた本格的なもの。

以上のデータと伽藍及び塔が東に偏していることを考えると、古式の寺院を塔のみ改造して七重塔とした改造国分寺の可能性が大きいですね。